

● さいうさん  
ふたりから  
いつか

ひとりになる日々も  
ぼたージュだけで生きのびてみる

● 高田皓輔さん

ちからこぶ確かめ合って雪解けの  
ような裏声響かせ合った

● 汐見りらさん

食べていいフルーツなのか  
分からずにティーだけ啜る  
都市とは覚悟

● 松下 誠一さん

ヒヤシンス同士だったと思ひます

● 雲理そらさん

渡されたカンヴァスに  
数字だけを書く  
信じていた時間が長すぎて

詩歌がダイアローグであることを思い出させてくれる作品群。目の前にいるあなたを信じること。その確信は私を支えてくれているのにもかかわらず、つねに喪失の予感に怯えてしまう。口当たりのいい、消化に負担の少ないポタージュは、かつてのあなたのように私を、私の孤独を生きのびさせてくれる。裏声を響かせ合うすこやかな獣のようにともに過ごした時間も過ぎてしまえば、友だち同士、恋人同士だったかさえも「思ひます」という主観的で曖昧な言葉でしか語れなくなる。知恵の木の果実は聖書の天地創造の原初から「食べていい」のかどう

うかを迫られるものだつた。都市も生殖も繁栄は覚悟によつて成り立つてきた。喪失のうちに手元に残るものはなく、履歴書のようになにかを記入する数字を書き連ねてゆくしかないのかもしれない。

●ムクロジさん

具の沈むおでん

テレビは二画面に

●福山ろかさん

紫陽花は黄緑の新美術館

●大西 美優さん

亀鳴いたかも

皮膜タイプの二重のり

●マズルカさん

ゆーとぴあそんな程度の学歴で

●早瀬はづきさん

ひと春のひとびとが歯に隠しもつ

金のあるいは銀の王冠

生活が近代化するなかで発掘された言葉と詩のあたらしい取り合わせの方法。情報の消費スピードの速さを象徴する二画面の液晶と、煮詰まりながら緩やかに沈んでゆくおでんの対照が暗示しているものとは。先鋭的な建築であるどう新美術館が色褪せて朽ちてゆくさまを雨とともに見つめる眼。春の訪れを知らせる亀鳴くの季語とまぶたに皺を作る二重用の糊。しわばむように温む水面と薄い皮膚、亀の伸び縮みする身体の質感の巧妙な調和。理想郷にももちこまれる学歴の価値基準。しかし本来、自分たちの国をより良くしようと教育水準の概念をもちこんだのもまた私たちなのだ。かつて頭に掲げられていた権威の王冠がなくなつた代わりに、人々はひつそりと口の中に金歯、銀歯を歯の冠として隠すようになつたという。春のほのぐらい寓話として。

●奥井 健太さん

冬、近し絵を描く時のズボンです

●波野 梅雨さん

ああそだねの平原に殴られた

●azusaさん

数学と別れて水羊羹を切る

陽射しの当たり方で光ってみえる石があるように、日常のなかでふいに発せられた言葉や、出くわした場面のなかにも、思わず詩的瞬間が出現することがある。絵を描く時だけに履く、汚れるためのズボンだと、誰が誰に対する弁明の台詞なのか。何でも無いみじかい相槌の言葉に、声の平原に、何十、何百の感情を意図せず受け取ってしまった衝撃。言葉の発信源に人間がいるという当然の複雑さをあらためて認識する。数学と水羊羹の関係。人と別れるようにして数学と手を切ったのか。何等分という数字的なことを考えずに羊羹を切るのか。みずみずとした黒い断面が別れの暗喩にも。

●金光 舞さん

サルビアが心臓なら 鳳仙花は癌

母さん、戻つてこないけど

ずっと言つてんの

●齊藤 葉さん

灯籠を流して過去がのびてゆく

もう戻らない人、もの、時間へ言葉をかけるのが本来の詩の役割なのだろう。臓器が活動することで癌細胞が増殖してゆく不気味さが、サルビアと鳳仙花の鮮烈な夏のイメージに拡がる。家族愛の花言葉のあるサルビアと、私に触れないでという花言葉のある鳳仙花は、相反する赤さと昏さで残されたものに迫る。亡

き人たちの鎮魂のために流す灯籠の祭事。季節がめぐり同じ過去に思いを馳せるほどに、過去の歳月は引き延ばされて、生きる私たちをつねに脅かし、後悔させ、悲しませる。それでもその過去のどこかの地点に思う相手がいるから、伸び続ける過去から目が離せないのだ。